

「防ぎたい不慮の事故(その2)」

0歳を除く子どもの死因の上位が不慮の事故です。長年にわたりこの傾向は変わっていません。死に至らなくても、大きなリスクを伴う誤飲は日常的に起こっています。

子どもは、生後5、6か月を過ぎると、手にした物を何でも口へ入れるようになり、移動ができればと、気になる物へ自分から近づき口に入れてしまいます。生後8か月ごろには随分と手先が器用になって、小さい物を指先でつまみ動作もできるようになります。異物の誤飲は8か月ごろから2歳に多いといわれています。厚生労働省の「平成27年度家庭用品等に係る健康被害病院モニター報告」での、小児誤飲事故の一番はたばこで22%です。次いで医薬品・医薬部外品17%です。たばこや薬は危険だと認識しているながらも、変わらず誤飲が多い現状です。以下、プラスチック製品、金属製品、電池、硬貨と続きます。ボタン形電池、特にリチウム電池は、短時間で消化管の壁を損傷させます。たばこのニコチンが溶け出した水の誤飲なども、決して起こさないように気を付けましょう。

危険な物は子どもの目に付かないよう、子どもが触ることができない所で十分に管理します。昨日は想像もできなかったことを今日やっている、それが子どもの発達です。

地域や社会には温かい見守りや支えがある半面、たくさんの危険も潜んでいます。親は子どもをずっと、自分の目の届く所、手の届く所に置き続けることはできません。自分で身の安全を守ることができるようにするため、全ての危険から遠ざけるのではなく、幼少時から安全に配慮しながらも危険について子どもに伝え、注意力や判断力を付けさせていくことはとても大事です。



めぐみ保育園 園長
弘田 恵子

めぐみ保育園園長。22歳で助産師になり、4年間高知の総合病院産婦人科でさまざまな出産に立ち会う。26歳から大阪府立母子保健総合医療センターのNICUで、6年間未熟児や障害のある赤ちゃんのケアをし、その後堺市で母乳育児相談室を仲間と開設。19年前から高知市内の保育園で、日々子どもたちと楽しく暮らす。助産師、看護師、保育士、幼稚園教諭(二種)。

